

問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「電話」と子どもが親にいった場面を想定してみよう。「これは、立派な一語文である。ただし、その意味はさまざまに解釈可能だ。「電話」が出て「電話をかけた」といった、話し相手への要求とも取れる。他方、「今電話で話している最中である」という叙述文としても、理解する必要がある。では、どちらが正しいのか。

それは、「電話」という①シチュエーションからでは判断できない。むしろ私たちは、発話の意味を把握しようとする際、言語の情報を手がかりに、推論によって相手が何を伝えたいのかを推しはかるのである。「でん・わ」という音の組み合わせ以外の手がかりとして、イントネーションや声の調子、また音声要素だけに頼りず、顔の表情やジェスチャー、今、話がなされた場の状況などの要因を②斟酌する。加えて、過去の記憶から話し相手に関する知識なども引き出して、総合的に相手が何を伝えただったのかを判断するのである。

これは、いわれてみれば当たり前のことに違いない。しかし一般に言語というのは、たいへんシブシブ性の高い記号であるともなされている。ひつまようち言語的「コミュニケーション」というのは、記号性の高い情報の伝達手段を受けとめられがちであるが、その記号の指示する意味の適切な解釈を支えているのは、(一)全然記号的でない側面なのである。

それどころか、記号を③シブ通り記号として解釈することは、およそ非人間的な意味理解であることが、最近の研究から明らかになつてきた。というのも、人間以外の霊長類の行う音声「コミュニケーション」こそ、まさにそれにあたるからにほかならない。

うと、チンパンジーに代表される類人猿であることは④シブウチの通りである。逆に霊長類として進化的にいちばん下等なのは、原猿と総称されている。マダガスカルに生息しているキツネサルが典型として、よく知られている。

ところが、そのキツネサルにすら、⑤「ア」も「ウ」も「エ」も「オ」も「カ」も「キ」も「ク」も「ケ」も「コ」も存在する。例えば彼らの天敵にあたるような捕食動物が近づいてきた場面を思い描いてみよう。そういうとき彼らは独特の声を発する。「ア」の声を耳にすると、周辺にいる仲間(同種個体)はただちに自らの身を守る防衛反応を行う。結果として群れに危険の接近をシブウチする機能を実行しているところから、警戒音と命名されている。

ただし、天敵の種類はさまざまである。大別しても、空からやってくるものと、地表から来るものがある。それによって防衛の手段の講じ方も、おのずと異なってくる。空からの場合は、地表近くへ身を伏せた方がよい。だが、もし地表から危険が迫ってきているのに、空からのときのように逃避を⑥企てること、とんでもないことになる。

そこで淘汰圧注①が働いて、キツネサルは複数のタイプの警戒音を出すにいったのだ。例えばAとBという二種類の声が存在するとして、空から捕食動物がやってくることをAの声を発する。すると、聞いた仲間は地表へ逃げる。他方、地表から敵が来るとBの声を発する。その際は、仲間は木の上へと逃げる。

AもBも、警戒警報である。ただしAは空からの危険、Bは下からの危険を意味している。(二)これは、ほんの単語にみる表現に近い。そういう観点では、彼らも記号的「コミュニケーション」を行っていることになる。

それどころか、彼らの方が人間よりも、厳密に仲間の発する音声を記号的にとらえているのである。ヨーロッパの昔話で、いつもいつも「4」が来た」とウソを村人に伝えて驚かせては喜んでいた少年の物語というのをご存じだろう。村人たちは、はじめは信じこんでびっくりしていたが、そのうち誰も信じなくなつた。あげくのはては、本当に狼が来て誰も助けてもらえず、羊を食へられてしまった少年のエンディングである。

ああいうことは、キツネサルでは起こらない。彼らだったら極端なケースとして、100万回「狼が来た」といわれても、やはり逃げることはない。警戒音の認識に、音以外の手がかりは介入しない。ともかく身の危険にかかわることだから、少々いかがわしい情報であっても、(三)この「ア」が安全、という発想が働く。サルの理解の仕方は、柔軟性に欠けるのだ。

「柔軟性を欠く」と書くことは、融通が利かす頭が悪いみたいだに聞こえるかもしれない。しかし⑦シブガルの記号としての意味作用に忠実であるという意味では、人間より抽象度の高い認識を行っていると言い換えることもできないのではないだろうか。

「人間は、過去の経験をもとにして、この意味理解を覚えていく。反対にこのことは、発話を行う側も、常に相手に聞き入れてもらえるよう配慮して話をするべきことを意味している。そして、聞き手は相手がこちらを意識して話していることに気づいていく以上、(四)この意図を把握して、発話の意味を察する。」

考えてもみよう。「昔は、よく勉強した」といわれたら「せよ、それがシブシブ通りの言ひかたでは、勉強しない」「ア」への皮肉なのかは、文字の配列から判断することは不可能に近い。相手の顔色を読み、状況を斟酌し、あるいは話し手の普段の⑧「ア」を参照しながらはならない。

つまり言語理解というのは、意外なほど記号的でなくて、反対に相手の心を読む(発話を手がかりに心理を推測する)過程であることがわかる。むしろサルの方がよほど厳密に記号類別に⑨「ア」を用いて情報伝達を行っているのだ。

ところが、最近の日本人を観察してみると、その「コミュニケーション」の「言」語「進」化の「進」む「方」向を「逆」行「し」て「い」る「よ」う「に」思えてならない。つまり、この「ア」のメッセージを常に記号として把握する傾向が高まっている。そして、そういう認識の仕方をサルが実行している以上、サルのな方向へ「コミュニケーション」のスタイルを変えてきたという結論にたどりつくのだ。

少しむずかしく書くところ、今まで述べてきた、いわゆる人間独特の言語の「意図」を「シブ」は「シブ」な、指し示す対象と記号との関係が⑩「恣意的」である「コミュニケーション」と呼ばれている。「意図明示的」というのは、言語の「シブ」な、指し示す対象と記号との関係が⑩「恣意的」である「シブ」を媒介として、伝達の意図があることを話し手が聞き手に明らかに示し、そのことで相手の注意をひいてみますよ、ということである。

「推論的」というのは、記号そのものが指示するのみでは伝えきれない内容を、聞き手が推論して補ってやらないと、適切に情報の授受ができないということを意味している。注意を話者に向けようとする傾向に仕向けられた聞き手は、耳にしたことを実はほんの手がかりにしているにすぎない。そこを突破口にして、話し手が意図した解釈にたどりつくべく推論して初めて、言語的「コミュニケーション」は成立するのである。

この人間が行う推論過程の原理やメカニズムを解明することの重要性は、ここを扱う科学の中でも、「ごく近年、認識されはじめばかりである。そういう言語科学の中の領域は、語用論と呼ばれるようになってきている。

そして、語用論研究によって初めて認められるにいたった。これはを理解する上での人間の能力は、語用論能力という名称で知られるようになってきた。これは人間の行う認知情報処理の中の発話解釈に關与する側面に対応する。

「ひまわりくんと、昨今の日本人の「コミュニケーション」の特徴である「サル化」とは、すなわち⑪「語用論能力の衰退と表現することができる。そして、その傾向の背景としては、社会の「IT」化、人間同士の情報伝達が「クワイ」のような⑫「代物」への依存度を大きく増したことが考えられるのだ。

(正高信男『考えないIT』による。なお、本文の一部変更・省略がある。)



※注1 「淘汰圧」……環境や条件に適應できない生物は滅びることの圧力。

問1 波線部の①・③・④・⑥・⑦・⑧については漢字で記し、②・⑤・⑨・⑩については平仮名で読みを記しなさい。

問2 波線部(1)を説明したものと最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- (ア) シンボルとして言語が機能しているときに働く、言語の推論可能な側面。
- (イ) 言語が本来の機能として有する、「コミュニケーション」の媒介となる側面。
- (ウ) 発話の意味を把握しようとする聞き手が頼りとする、言語の語源的側面。
- (エ) 話し手が意図的に聞き手に伝えようとする、言語の辞書的な意味の側面。
- (オ) 言語に付随する要素や、言語自体の周辺にある状況などを総合した側面。

問3 波線部(2)、キツネザルの何が「』』とびび』もどき』なのか、適語を抜きだしなさい。

問4 波線部(3)について、なぜそう言えるのか、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- (ア) キツネザルは、それぞれの警戒音を、特定の内容を必ず意味するものとして区別して聞いているから。
- (イ) キツネザルは、警戒の声を発することで天敵から逃げ、淘汰圧に耐えてずっと生き延びてきたから。
- (ウ) 声を用いたキツネザルの警戒警報は、人間が聞き取って文字としてあらわすこともできるから。
- (エ) 天敵を意味するキツネザルの声は、彼らなりの文章の中の一つの要素として用いられているから。
- (オ) 上と下を区別したうえで危険を伝達する声は、キツネザルの生死に関わる重要な情報だから。

問5 波線部(4)と、キツネザルの声との共通点はどんなことか、一〇字以内で答えなさい。

問6 波線部(5)と、反対の行動を示す表現を、一〇字以内で抜きだしなさい。

問7 波線部(6)と、意味の異なるものを次から選び、記号で答えなさい。

- (ア) 狼が来ても助けてもらえない。
- (イ) 「狼が来た」といわれて逃げる。
- (ウ) 理解の仕方が柔軟性に欠ける。
- (エ) 抽象度の高い認識をしている。

問8 波線部(7)とあるが、「狼が来た」の例においてはどのようなことを指すか、六〇字以内で説明しなさい。

問9 波線部(8)を端的に言い換えた表現を、一〇字以内で抜きだしなさい。

問10 波線部(9)は、日本人のどのような点を指摘して、そう述べているのか、二五字以内で抜きだしなさい。

問11 波線部(10)とあるが、「語用論能力」が衰えて何が起こったのか、三〇字以内で指摘しなさい。

問12 本文の内容に合致しないものを次から選び、記号で答えなさい。

- (ア) 発話の意味を人間が把握する場面においては、さまざまな面から推論が行われ、言語のシギとは全く関わりのない要因も用いられることがある。
- (イ) キツネザルの警戒音は抽象度が高く記号的側面を持つが、実際の人間のことはを介した「コミュニケーション」とは、推論の有無の点などで異なる。
- (ウ) 本来の「コミュニケーション」は、聞き手がその思いを話し手に明示し、それを受けて、話し手が聞き手の望む内容を推論して語ることと成立する。
- (エ) 指し示される対象と記号との関係が必然的でなく、恣意的である点で言語はシンボルであり、これを媒介にして意思ソツウが行われる。
- (オ) 言語使用に関わる推論過程の原理や、そのメカニズムの重要性を認識する語用論は、発話に伴って発揮される人間の能力に着目している。